おもいでの形は人それぞれ。

私の場合は、忘れ去った頃にどこからともなく出てくる「紙きれ」が一番昔を懐しむ材料になる。

高校時代、よく授業中に変なものが回ってきた。飴やガム等の小腹を満たすものだとか、ルーズリーフの切れ端だとか。とにかく先生に見つからないような、ミニサイズのものを友人間で回し合うのが、当時私達の間では流行していた。

「この時間終わったら、食堂直行な」

「今日こそ、カラアゲ食ったんねん」

頻繁に机の上に放られる紙には、しょうもない内容の文章。たまにイラストが付いていたり、稀に可愛いメモパッドを使ったりしている"紙切れレター"は、まさに私達の青春がつまっていた。一日に数回やりとりをして、ペンケースや制服のポケットにしまいこんで。いっぱいになった頃に読み返したりして「あほやなコイツ」などと笑ったりするのが好き

だった。

今年四月。高校時代、一番仲の良かった友達が結婚することになった。送られてきた招待状の宛名は、四年前毎日のように見ていた丸っこい字。中には式の案内ハガキ二枚と共に――ちいさな紙切れが一枚入っていた。式に来てくれることと二次会幹事を引き受けたことに対する礼を書いた紙は、流石にルーズリーフの切れ端ではなかったが、学生の時と変わらずどこかの文具屋に売っていそうなハムスターのイラストが描かれたメモ。行間をいっぱいいっぱいまで使うクセもそのままで、私は思わず笑ってしまった。

二十才を越えてからちらほらと行くようになった友人の結婚式で、私はまずまっ先に"座席指定カード"の裏を見る。一枚一枚手書きのメッセージは、しょうもない内容のくせに涙を誘うから不思議だ。一コの文字は、彼女達の「心」と「時間」。選ばれていく紙切れは「おもいでの形」。写真よりも捨て難い。

コクヨ ケ-20 20×20